



東北大学

ISSN 0385-7506 Vol. 31, No.2 2006



東北大学附属図書館報

木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

－木這子（きばこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）－

目 次

○図書室，駆けあし記……………1	○オープンキャンパス2006「漱石と青春」展 開催報告……………16
○場としての図書館，経営者としての図書館員 ～平成18年度大学図書館職員長期研修参加報 告～……………3	○連載「江戸の食文化」を巡る話題から（4）： 仙台藩の食と名産品……………19
○平成18年度 目録システム地域講習会 （図書コース）を受講して……………4	○平成18年度東北大学附属図書館企画展 「江戸の遊びーけっこう楽しいエコレジャーー」 ……………22
○平成18年度目録システム地域講習会（雑誌 コース）を受講して……………6	○平成18年度目録システム地域講習会（雑誌 コース）を開催……………24
○東北地区大学図書館協議会合同研修会 東北大学附属図書館における企画展の取り 組み……………7	○ハワイ大学バゼル山本登紀子氏との「情報 リテラシー教育」に関する情報交換会……………25
○平成17年度参考図書購入報告……………12	○青葉山新キャンパス構想連続講演会……………26
○平成17年度特別図書購入報告……………14	○第61回東北地区大学図書館協議会総会……………27
○「附属図書館オープンキャンパス2006」を 開催……………15	○会 議……………27
	○人事異動……………28
	○編集後記……………28

図書室，駆けあし記

加齢医学研究所 佐 竹 正 延

図書に対する畏敬の念を自分が失ったのは，振り返ればいつ頃だったのでしょうか。ヒマな御方は，図書室・思い出話にお付き合い下さい。

私が生まれ育ったのは東北地方の農村で，現在の福島市のはずれにあたります。村の小学校といえども，図書室は備わってありました。そして4年生になると，図書室の使用が許されます。初めて見学した図書室はあくまで広く，あくまで静かです。今にして思えば大きな活字が

パラパラの児童文学全集も，子供の目には字がぎっしりと並び，かつ書棚を埋めつくしているかのようなでした。「宝島」とか「三銃士」とかお決まりのダイジェスト版ですが，挿絵の効果もあり，心躍らせて読むのが図書室。1週間に1冊を借り出しても，とうてい読み切れず，世の中にはたくさんの物語があることを知ったのが，そもそもの始まりです。

次いで中学生になりますと，図書室のイメー

ジは少し変わります。放課後に部活動が行われておりましたが、異彩を放っていたのが文芸部。笑わないで下さい、田舎の中学校にもちゃんと文芸活動が存在したのです。ところが不思議なことに部員はなぜか、女子生徒ばかり。1年生の私には上級生の彼女らが眩しく、従って参加しなかったのですが、眩し過ぎて気後れしたのは、今も悔やまれてなりません。とはいえ気になる年頃とて、窮っておりますと、どうやら彼女らは日記や詩（詩です！一体、何を書くのでしょうか？イガグリ頭の自分には想像も出来ない世界でした）などを書いては、互いに見せ合い話し合っている様子であり、その交換の場が図書室なのです。100メートル走とか走り幅跳びなど、炎天下で動物みたいな部活動をしている自分が、近づきたくとも近づけない場所。それがセーラー服のチラホラする図書室なのでした。

大学生になっても、図書室の威厳は続きます。医学生などといっても、実は大したものではないことの、それが証拠は大学の医学図書館です。学生は教科書を読んで勉強します。従って本といえば教科書くらいしか思い浮かびません。しかし図書館に入れば、教科書なぞは見当たらないのでした。代わりに見たこともない、全く別種の本がそれこそ、建物内の隅から隅まで、床から天井まで整然と並んでいるのです。それらは研究雑誌が製本されたものであり、厚手の黒カバーに綴じ、背表紙には J. Exp. Med. などと金文字が打たれています。J. が journal の略記であることなど、知る由もない医学生の自分には、何だか分からないがとにかく学問がいっぱい詰まっていると覚しき本が、それこそ山を成しているのが図書室。即ち、学問、イコール図書館のような気がして、重厚さに圧倒されたものでした。

研究者になりたいと思ったのは、生徒から学生の時分にかけて刷り込まれた、図書館の威容が影響して与ったのかもしれません。まずは大学院学生当時の自分。勉強せねばなりませんから先程の J. Exp. Med.などを図書室から借用、コピー機が登場した頃で、目当ての論文を複写します。読まねばならぬ論文は数多く、製

本の持ち運びは一苦勞です。とはいえ意気盛んな青年学徒であってみれば、それら論文の端から端まで、難解な部分は訳出までして読み切ります。こうして図書を活用した時代は、そうですね、助手・助教授時代までは続いたでしょうか。

変調をきたしたのはその後です。つまり研究室を担当するようになってからというもの、自分にとっての図書・図書館の相貌が、それまでとは異なってきたのです。というのも馬齢を重ねれば、論文や本を読むエネルギーは自然、減退してまいります。一方、それに逆比例して大学院学生さんは、当方よりもはるかによく論文を読むようになります。従って図書室から雑誌を借用して自分で読むよりかは、学生さんに尋ねた方が早いのです。加齢現象に追い打ちをかけたのが環境因子、近年の電子ジャーナルの普及でした。パソコンに向かい、クリックなどという動作をしますと、簡単に論文まで行き着けますし、本文は直ちにプリンターから捌き出されてきます。情報化時代は便利この上もなく、いつでも論文を手元に引き出せるのです。すると安心感からか、論文は滅多に目を通さないという、逆の事態となってしまったのでした。こうして私にとって図書や図書室の存在は軽くなる一方であり、図書室に歩を向けるのは、会議の用事ばかりとあいなりました（商議員を務めております）。

最近では、冊子体を伴わない e-journal オンラインの雑誌（？）も出版（？）されています。医学論文では染色像、従ってカラーの図が多く、論文出版時のカラー料金は高額です。e-journal であれば、カラーをいくら使用しても無料。e-journal に論文を掲載したことはまだありませんが、誘惑に負けて投稿でもした日には、それこそ私の図書への敬意はナッシング。

そこで提案です。図書を畏敬できないなどと、暴言を吐く不逞な輩には、電子ジャーナル利用の度に個人課金すればどうでしょう。図書館の有難味が少しは分かるかもしれません。図書も金の光背に包まれて復活するかもしれません。そうだ、次回の商議会で発議しよう。向学心に燃える学生さんは、勿論、免除です。

（さたけ・まさのぶ）

場としての図書館，経営者としての図書館員

～平成18年度大学図書館職員長期研修参加報告～

電気通信研究所総務課図書係長 村 上 康 子

平成18年7月3日（月）～14日（金）の2週間、筑波大学において、「大学図書館職員長期研修」に参加する機会を得た。

久しぶりの母校は、当時まだ若木だった木々が生い茂り、月日の流れを物語っていた。

今回の研修内容は、植松筑波大学附属図書館長の挨拶の中でも示されたが、「新しい試み」とのこと、従来の図書館業務各論を刷新したものとなっていた。

経営学入門、プレゼンテーション演習、顧客戦略、企画書作成演習など、図書館経営に直結する内容の講義を中心に、利用者の変わりゆく図書館へのニーズとそれらに対処すべき大学図書館員の役割や、電子資料の動向及びそれらを取り巻く様々な環境についてなど、日々の業務の中で浮き彫りになってきた現実問題の解決策を示唆するものであった。

その他、「大学図書館の危機管理」と題して、カウンターで起こりがちな利用者との様々なトラブルの対処法など、対人業務のノウハウを心理学の側面から講じたものや、日本一のオンラインショップを展開しているアマゾンジャパンによる顧客志向戦略のプレゼンテーションなど普段なかなか聞き得ない内容のものもあった。

勿論、大学図書館職員の知識として欠くことのできない、著作権、CAT/ILL 共同事業関係、大学図書館経営の現状などの講義もあり、そこでは、最近の動向などを中心に、大学図書館職員がそれらにどう取り組んでいったらよいのかを考えさせられる内容が盛り込まれていた。

それぞれの講義の合間には、活発な質問や意

見交換があり、プレゼンテーション等の発表の場では心地よい緊張感が走り、班別討議では、与えられた課題の他に、それぞれの職場での問題を話し合うなど和やかな場面もあった。

また、見学させていただいた、東京大学柏図書館の自動化書庫の外観には、圧倒された。

「図書館に利用者は来なくなる」。講義の一局面で耳にした言葉である。今まで、自分でもそう予感しながら、現実問題としてしっかりと受け止めていなかったことに気づかされた一言であった。図書とパソコンが共存するハイブリッドライブラリー、利用者に学習の場を提供するラーニング・コモンズへの展開など、利用者のニーズを素早くキャッチしてサービスに盛り込む技術が必要なのだと痛感した一コマであった。

また、ある講義では、大学図書館の存続が危惧される中、「もっと大きい夢をもってよいのだ」「自身をもって推し進める実力を持って」と言わんばかりに、ご自分の図書館への思い入れをお話してくださった講師もおられた。経営者は、夢を抱いてよいのである。図書館の経営は、夢を実現しようと試みた時に始まるのではないかと、気力が湧いてくるエールのような講義だった。

この研修では、知識の習得は勿論、物事を遂行するための様々なノウハウを教わることができた。自分なりに咀嚼したものを今後の業務に還元して行ければと思う。

また、かけがいのない同志34名を得られたことも、本研修での一番の収穫である。

研修後の筑波は去り難く、しかし、この先の使命感のようなものが、強く自分を支配した。

最後に、研修へお世話いただいた皆様、留守中、サポートをいただいた職場の皆様、そして、

子育て中の我が身を研修へと送り出してくれた家族へ、感謝の意を表したい。

(むらかみ・やすこ)

平成18年度目録システム地域講習会(図書コース)を受講して

農学分館図書係 渡 部 知 美

平成18年6月28日から30日までの3日間、東北大学附属図書館・国立情報学研究所の共催による標記講習会を受講する機会を得ました。

この講習会は、目録所在情報サービスを利用する上で、共通に理解しておくべき、総合目録データベースの構成・内容・データ登録の考え方(入力基準)を習得することを目的としたもので、サービス参加館における目録業務担当者を対象に開催され、受講者は私を含め東北地区の国公立大学及び公立図書館職員、計15名でした。

講習会の概要については以下の表をご参照ください。

目録システムは、参加館による共同分担入力方式をとる事により、複数の図書館において作

業の重複を避け、目録業務の負担を軽減する役割を果たしています。また、オンライン上でデータ登録を行う事で、最新の目録所在情報を迅速に提供する事が可能です。しかしながら、共同分担入力方式によって作成された目録の品質維持には、並ならぬ苦労があります。

十人十色の言葉通り、十人のカタログガー(目録作成者)がいれば、十の目録が出来上がってしまわないとも言えません。けれども、それでは目録システムをゴミの山にしてしまうだけです。私たちが作成する目録は、誰の目から見ても、同一書誌であると同定出来る目録でなければなりません。そう言った点からも、講習会では、多くの時間を様々なケースの書誌の登録に費やしているのではないかと思います。

月日	午 前	午 後
6/28 (水)	目録システム概論〔講義〕 目録情報の基準〔講義〕	目録検索〔実習〕 登録総論〔講義〕 所蔵登録〔実習〕
6/29 (木)	書誌流用入力〔実習〕 (階層なし・階層あり・参照ファイルからの流用)	書誌流用入力〔実習〕 (出版物理単位・総合データベースからの流用)
6/30 (金)	書誌新規入力〔実習〕 書誌修正〔実習〕	補講・自由演習・まとめ など

ですが、実際の業務で、書誌登録を行う事はあまりありません。共同分担入力方式では、一つの参加館が目録を作成すれば、他の参加館はその恩恵を受ける事が出来、新たに目録を作成する必要がありません。故に、目録を作成しなければならない機会に出会うのは極々稀なのです。

その為、普段の業務では、自館で登録しようとする資料に対応するレコードが既に総合目録データベースにあるかどうかを確認する「検索」が重要な作業となります。検索が正確に行われない事は、同一内容レコードの重複登録や異なる資料レコードへの所蔵登録を引き起こし、総合目録データベースの品質を下げる結果に繋がります。

また、千を超える参加館を持つ総合目録データベースは、午前中に検索して見付けられなくとも、午後には登録されている場合も十分にありえます。検索力だけでなく、登録作業の直前に検索を行う心構えも必要です。

図書館員として、自分の仕事に誇りを持ち、方針を貫こうとする精神は素晴らしいとは思いますが、その精神故か、一つの書誌を修正し合っている参加館もあるとの事でした。このような事実は共同分担入力方式の利点が活かされていないばかりか、他の参加館にも混乱を与える行為ではないかと残念に思います。目録の品質維持の為にも、誤りを見付けたら報告・修正する事は大切ですが、個人のこだわりを理由とし

た安易な書誌修正は如何なものかと思います。

その他の事例として、意図的ではないにせよ初歩的な操作ミスから、書誌レコードを全く別の書誌に書き換えてしまったり、所蔵レコードを付けずに書誌を登録してしまったり、削除予定レコードに所蔵レコードをリンクさせたままでいたりといった「うっかり」ミスが目立つという話もありました。日頃から緊張感を持って、慎重に作業を行う必要性を切実に感じます。

講習会を通して、何よりも実感したのは、目録システムを宝の山にするのも、ゴミの山にしてしまうのも、私たち図書館員次第であるという事です。今回の講習会では、操作方法だけでなく、宝の山を守る為、図書館員がどのような点に注意を払わなければいけないのかといった、意識の面でも学んだ事が多かったように思います。

講習会では、総合目録データベースの構成・内容・データ登録の考え方（入力基準）といった基本的な概念や操作方法を習得するだけでなく、心構えや経験者である講師の方々の体験談などを伺う事も出来ました。これらは今後の業務を有意義なものにしてくれるのではないかと感じられました。目録業務を円滑にするだけでなく、後進の自覚を促す為にも、今後もこのような機会を是非とも多く設けていただければと思います。

最後になりましたが、ご指導くださいました講師の方々を始め、関係者の皆様に心から感謝申し上げます。本当に有難う御座いました。

（わたなべ・ともみ）

平成18年度目録システム地域講習会（雑誌コース）を受講して

工学分館管理係 坂 本 香 代

平成18年7月19日～21日の3日間、東北大学附属図書館で行われた平成18年度目録システム地域講習会（雑誌コース）を受講する機会を得ました。東北・北海道地区の国公私立大学，県立図書館などから合計20名が，本講習会を受講しました。

私は平成17年度から雑誌業務に携わってはいったものの，目録に関しては所蔵の更新や総合目録データベースからの書誌取り込みという業務が主でした。書誌修正の経験すら少ない中で，新規書誌を作成した際には苦労したことを覚えています。それに「書誌の作成や修正は難しい作業である」という先入観があり抵抗があったように思います。

さて，3日間の講習会では目録システムの概要をはじめとして書誌の検索や所蔵登録，書誌の作成・修正などを学びました。普段は行う機会が少ない書誌の作成・修正についても，さまざまな課題により実習を行うことができ，和・洋資料間の記述の違いも具体的に知ることができました。作業のポイントとしてはデータを記述する際の記述文法や注意事項を把握する，書誌と情報源をよく確認するという点があげられると思います。正確に行う必要がある作業ですから慣れないうちは緊張しますが，敬遠せずに率先してチャレンジすることがスキルアップのコツかもしれません。

今回の講習会では，最近方針変更があったタイトル変遷の基準について詳しく話を聞くことができました。国際標準書誌記述や英米目録規則第2版，日本目録規則1987年版改訂2版の改訂により，タイトルが変化した際に新規書誌を

作成しない「軽微な変化」の適用範囲が拡大されることになったのです。それに伴い，総合目録データベースでも「軽微な変化は変遷とせず同一レコードとして扱う」という基本方針が平成18年4月から適用されています。変更以前は，わずかな変化でも新規書誌が作成され，細かな違いのある書誌が増加することやその管理の煩雑さが問題視されてきました。今後は，変遷による新規書誌作成が抑制されることになるかと期待しています。

昨今，雑誌の世界では電子ジャーナルが注目されがちです。日常業務でも目録は，作業量が少ないせいかあまり重視されていない印象を受けますが，このような状況は目録システムの品質維持に対する意識や担当者のスキル低下の一因となっているのではないのでしょうか。利用者が求める資料にスムーズに行き着くには，正確な目録データを常に提供することが必要不可欠です。そのためには目録担当者が専門知識を継続して習得しスキルを向上させることが重要ですが，それを個々の担当者の努力に任せるだけでは不十分ではないのでしょうか。目録システム参加機関の一員として，図書館全体での取り組みも必要であると痛感しています。

今回の講習会は，図書館学の授業でも学ぶことのできない目録業務の基礎知識を学べただけではなく，その重要性を再認識できたという点でも非常に有意義なものでした。講師の方々や受講の機会を与えてくださった関係各位に心からお礼申し上げます。

（さかもと・かよ）

東北地区大学図書館協議会合同研修会

東北大学附属図書館における企画展の取り組み

情報管理課受入係 木戸 浦 豊 和

1. 東北大学附属図書館の企画展

(1) はじめに

これから「東北大学附属図書館における企画展の取り組み」ということで、本館の展示会活動について報告したいと思います。

はじめに本館の企画展について具体的に紹介し、次いで生涯学習という観点から、その活動の意義、地域への貢献ということについて考えてみたいと思います。

(2) 企画展とは

企画展とは、本館が毎年秋に行っている展示会のことで、平成10年度（1998）から継続して実施してきました。

まず平成10年度は、はじめての企画展ということもあり、本学の所蔵する主な貴重資料を言わば総花式に展示し、紹介しました。

平成11年度から平成14年度までは、「狩野文庫」の資料を中心に江戸時代を通史的に取り上げています。

平成15年度には、「漱石文庫」と、新たに受け入れた漱石の関連資料を中心に、正岡子規をはじめとする様々な文人たちとの交流を紹介しました。

平成16年度からは再び江戸時代に戻り、今度は和算や食文化などといった、言わばテーマ史を扱っています。

これまでの企画展

- ・平成10年度(1998) 「貴重資料展」
- ・平成11年度(1999) 「江戸文化のはじまり」
- ・平成12年度(2000) 「十八世紀の江戸文化」
- ・平成13年度(2001) 「花の大江戸と異国の影」
- ・平成14年度(2002) 「江戸の終焉―黒船・開国」
- ・平成15年度(2003) 「明治・大正期の文人たち―漱石をとりまく人々」
- ・平成16年度(2004) 「江戸の数学―いま、和算がおもしろい」
- ・平成17年度(2005) 「江戸の食文化―スローフードのルーツをたどる」

(3) 企画展の仕事

企画展は、図書館本館の職員を中心に10名前後のワーキング・グループを設置し、教員の協力も仰ぎながら、取り組んでいます。

展示会までの仕事の概略は、まず、展示のテーマを決定し、次にそのテーマに沿って展示資料を選定してゆきます。展示する資料が決定したら、資料の解説文を執筆し、次いで解説目録または展示会図録の編集を行います。同時に関連イベントの企画や、広報活動なども行ってゆきます。これらの作業はワーキング・グループのメンバーがそれぞれ役割を分担して行っています。

企画展の仕事

- ・テーマの決定
- ・展示資料の選定
- ・資料解説の執筆
- ・解説目録・図録の作成
- ・キャプション・展示パネルの作成
- ・関連イベントの企画
- ・広報活動
- ・その他（スケジュール・予算の管理、アンケートの集計、報告書の作成など）

（４）テーマの決定

ではもう少し具体的に仕事の内容を見てゆきましょう。

まず、展示会でもっとも重要なのは、言うまでもなく展示会のテーマです。本館ではワーキングのメンバーがそれぞれアイディアを持ち寄り、どのような内容、主題を扱った展示会としたいのか意見を出し合い、全体のテーマを決定します。

展示会全体のテーマが決定したら、次にそのテーマに連なる小テーマを設定し、展示の概要を構成してゆきます。私たちの企画展では、全体の大きなテーマをさらに3つか4つの小テーマに分け、展示を構成するのが通常となっています。

そして、テーマと小テーマ、展示の概要が決まったら、展示のテーマを端的に表し、かつコピーとしてもインパクトのあるような展示会名を考えます。

（５）展示資料の選定

続いて展示資料の選定作業に移ります。資料の選定にあたっては、入門書や参考書などで各自勉強しながら展示にふさわしい資料を調べてゆきます。この時、特に気を付けているのは、展示会全体のテーマや小テーマの中で、キーとなる資料、展示の中心となり、展示の流れの中で必要不可欠な資料を見定める、ということです。

また、展示する資料のほとんどが図書資料、平面的な文字資料であるため、ともすれば単調な展示になってしまいがちです。そのため、挿し絵のある資料や彩色資料を多く選ぶなど、展示を際立たせる工夫も必要になってきます。

以上のような点に注意しつつ、展示会全体で100点前後の資料を選定してゆきます。

（６）資料解説の執筆

展示資料が決定したら、展示会場に設置する資料の解説文（キャプション）、解説目録や図録に掲載する解説文の執筆に取り組みます。展示会の準備の中でもっとも時間を要し、また大切な作業です。解説文の執筆にあたっては、参

考文献や先行研究などを参照し、やはり勉強しながら、正確でかつ分かり易い文章を書くように心がけています。

（７）解説目録・図録の作成

本館では、これまで30ページ前後の小冊子を作成し、解説目録として配布してきました。版型や印刷部数は年によって違いはありますが、A4サイズまたはB5サイズの大きさを、1000部程度印刷しています。

解説目録や図録の作成は、各担当が執筆した解説文の原稿を、編集担当が取りまとめ、資料の写真などとともにレイアウトを作ってゆきます。

解説目録や図録は展示会終了後に唯一残るものなので、展示会の記録として後々まで伝わるよう、まとまりのあるものを作るべく毎年苦心しています。

（８）キャプション・展示パネルの作成

展示資料のキャプションについては、基本的には解説目録に掲載するものを手直しして作成しています。また、個々の資料解説で触れられなかった発展的な話題などについては、大きめの解説パネルとして壁面に掲示します。

会場での解説文の長さについては、あまり短くても物足りなく、また長すぎても読むのに疲れてしまうので、適切な長さの調整が必要になってきます。

（９）関連イベントの企画

このような解説文執筆や図録編集の作業と並行して関連イベントの企画なども展開してゆきます。

これまで企画展の関連行事として行った主なイベントとしては、講演会、シンポジウム、ギャラリー・トークなどがあります。

講演会は、研究者に依頼し、展示についての理解を深め、さらに、より専門的な話題を提供してもらうよう、平成10年度の当初より実施してきました。

シンポジウムは、平成16年度の「江戸の数学」展ではじめて企画し、教育機関などで実際に和

算資料を活用している方々に、事例報告をしていただきました。

また、平成17年度の「江戸の食文化」展では、江戸時代や食文化に関する4人の専門家をお招きし、パネルディスカッションを実施しています。

さらに、ギャラリー・トークといって、展示の担当者が、実際の展示資料を見ながら見学者に解説するという試みも行っております。

関連イベント

- ・講演会
- ・シンポジウム
- ・事例報告
- ・専門家によるパネルディスカッション
- ・ギャラリー・トーク（職員による資料解説）

(10) 広報活動

広報活動としては、まずポスターとちらしを作成し、近辺の教育機関などに配布し、掲示をお願いしております。

また、各マスコミや教育委員会などに後援名義の使用を申請しています。許可を得ることによって、展示会としての信頼性の向上にもつながります。

2. 展示会と地域貢献

(1) 展示会と生涯学習

以上のように本館では、試行錯誤を繰り返しながら、展示会活動を行ってきました。次にこのような展示会活動が地域社会で果たす役割について、少し考えてみたいと思います。

現在、展示会を実施している大学図書館は非常に多いと思いますが、例えば、早稲田大学図書館の松下眞也氏は、展示会の目的として、「メモリアル・セレモニーとしての展覧会」「教育・研究目的としての展覧会」「図書館の広報・利用者教育の一環としての展覧会」「エンターテインメントとしての展覧会」の4点をあげています（注1）。

松下氏のこの分類は、学生や教職員など、主

に大学の構成員に向けた展示会を想定しているように思いますが、さらに、松下氏のこの分類に、大学の外側に向けた目的、つまり大学図書館の地域貢献という観点から付け加えるならば、「生涯学習の場としての展示会」という点をあげることができるように思います。

では、「生涯学習の場としての展示会」とは具体的にどういうことでしょうか。そのことを考えるために、「生涯学習」ということから確認しておきたいと思います。

「生涯学習」という言葉は、昭和56年（1981）の「生涯教育について」という答申以降に定着していったといわれています。その答申によれば、「生涯学習」とは、「各人が自発的意思に基づいて行う」ものであり、かつ、「生涯を通じて行うものである」というふうにいわれています。

このように定義される生涯学習に対し、展示会はどのように関わることができるのか、まず「各人の自発的意志」という側面から考えてみたいと思います。ただし、ここで注意しておきたいのは「各人」と言っても展示会を訪れる見学者の方々は事前の知識も関心のあり方も様々であるということです。

そこで、展示会を行う際には、それをどのような人々に向けて発信するのかということについて、ある程度意識的になる必要があるように思います。

(2) 見学者の関心

博物館などで様々な活動を行う場合に、関心のあり方という観点から見学者を4つの層に分けて考えることがあるそうです（注2）。

それは、「関心」レベル、「勉強」レベル、「研究」レベル、「専門」レベルの4つです。

例えば、「関心」レベルとは、江戸時代について何となく関心がある、興味を持っているという場合が該当します。「勉強」レベルとは、もう少し明確な目的意識を持っている場合、例えば江戸時代の食文化について学んでみたい、などといった場合が当てはまるでしょう。「研究」レベルとは、もうすでに江戸時代について自分で本を読んだり調べたり、広い意味での学

習や研究に取り組んでいるような場合で、さらに「専門」レベルとは、江戸時代の専門家やそれに準じる人、といったような場合です。

そして、どのような見学者を主な対象とするのかによって、展示会のあり方も当然異なってくるでしょう。「関心」レベルや「勉強」レベルの見学者を対象とする時には、従来の知識や学説を分かりやすく整理し、解説するような展示会が望ましいと思います。それに対し、「研究」レベルや「専門」レベルの見学者に対しては、新しい知見や独創的な研究の成果を提示することが求められるはずです。

見学者の関心と展示の内容

- ・「関心」レベル

- ・「勉強」レベル

→従来の学説を整理・紹介するような展示

- ・「研究」レベル

- ・「専門」レベル

→新しい知見や、独創的な研究の成果を提示するような展示

私たちの企画展について言えば、当初より、「地域の方々の生涯学習への貢献」ということを大きな目的の一つに掲げてきました。そして、この場合の「地域の方々」とは、さきほどの例で言えば、江戸時代に何らかの関心を持っている人とか、あるいはこれから江戸時代のことをいろいろと勉強してみたいと思っている人、そのような方々に相当するかと思います。

（３）魅力的な展示会のために

そして、さきほど触れた生涯学習の理念の一つ、「自発的意志」ということに絡めて言えば、このような見学者の方々が、私たちの展示会を見ることによって好奇心や関心、興味を活性化させ、展示会が一つのきっかけとなり自発的な学習へとつながってゆく——私たちの展示会がこのような有機的なつながりの場となってほしいと思います。

そのためには、何よりも展示会としての魅力がなければならないということは当然のこと

でしょう。そして、もちろんこれがいちばん大変なことです。

展示会としての魅力を向上させるには、やはり、テーマの工夫が必要になってくると思います。

例えば、私たちの昨年度の企画展のテーマは、「江戸の食文化—スローフードのルーツをたどる」というものでした。この展示会の趣旨は、江戸時代の食文化を、「スローフード」という現代的な視点で見直してみようというものです。

このような、現代に通じるような問題や身近な話題を取り上げてみたり、新しい観点から眺めてみたり、さらには面白いストーリーや魅惑的なプロットを構想したり、先ほどの松下氏の分類にもありましたが、エンターテインメント性を取り入れる、といったような工夫も、多くの方々の興味を引くために重要になってくるかと思っています。

また、展示会というのは何よりも実物の資料を見て、いろいろ考えたり発見したり、あるいは楽しむための場です。そのため、資料の見せ方についても工夫が必要になってくるでしょう。

貴重な資料を、貴重だからという理由で陳列するのではなく、資料と資料を比較したり、資料間の影響関係を探ったり、といったような展示の工夫が、見学者の方々の知的な好奇心を刺激してゆくのではないかと思います。

（４）展示会と学習支援

そしてもし、私たちの展示会がきっかけとなって、そのテーマに興味や関心を持ち、もっと独自に調べてみたい、学んでみたいと思い立った方々へ向けて、何らかの支援を行うことも必要となってくるように思います。

その方策の一つとして、先ほども申し上げた展示会図録の提供ということがあげられるでしょう。

また、私たちの展示会では、見学者の方々から寄せられた質問と、それに対する回答をカードにまとめ掲示したりもしています。これはある意味では展示会におけるレファレンスサービ

スといっても良いでしょう。

さらに学外者の方々も本館資料の利用が可能であることをアナウンスすることによって、地域の方々の大学図書館の利用の拡大、さらには一過性ではない継続的な図書館の利用ということにもつながってゆくように思います。

このように、展示会が一つのきっかけ、一つの間となつて地域の方々の学習に有機的に関わっていくことができたなら、それを「生涯学習の場としての展示会」と呼んで良いように思います。

(5) 他機関との連携

では、もう一つのキーワード、「生涯を通じて学習する」という点について考えてみたいと思います。

「生涯を通じて学習する」とは、年齢にとらわれずに学習するというふうに言い換えることができるでしょう。そしてこの点を、展示会を企画する側からいえば、幅広い年代層を視野に入れる、ということになってくるかと思います。

私たちは今年度、宮城県図書館さんと共催というかたちで、「江戸の遊びーけっこう楽しいエコレジャー」という企画展を準備しています。「エコレジャー」とはおおよそ耳慣れない言葉だとは思いますが、自然や人との交流という視点から、江戸時代の遊びを見直してみようという趣旨です。

私たちの企画展はこれまで大学の中で実施してきたため、年代としては自ずと大学生以上を対象としてきたように思います。

一方、宮城県図書館さんは、子どもからお年寄りの方々まで、幅広い年代に向けて様々なサービスを展開しており、地域に関する資料も豊富にお持ちです。その県の図書館さんと協力することで、新しい見学者の開拓につながるのではないかと期待しております。

その具体的な取り組みとしては、江戸時代の子どもの遊びを取り上げ、紹介する予定です。さらに、子どもの遊びにちなんだ関連イベントも企画しています。

このように、ほかの機関と連携・協力することによって、より幅広い年代層、そしてより地

域に根ざした展示会活動の可能性が開けてくるだろうと思います。

(6) おわりに

以上、展示会の意義について、地域への貢献という観点から考えてきました。

昨年度、私たちははじめて大学の外に出て展示会を実施いたしました。その時、改めて感じたのは、展示会は学習の場であると同時に、地域の方々との交流の場でもあり、そしてその交流を通じて私たち自身も様々な学んでゆく、経験してゆく場でもあるということです。

私たちは今後とも、展示会という場を通じて、地域の方々の学習に貢献し、私たち自身も成長してゆくことができればと考えています。

※本稿は、「平成17年度 東北地区大学図書館協議会合同研修会」の発表内容にもとづきます。

(注)

- 1 芹沢俊介「自然史系中小博物館における教育活動の構成」(『博物館雑誌』1(2), 1976.3)
- 2 松下眞也「図書館と展覧会」(『早稲田大学図書館紀要』43, 1996.8)

(参考文献)

- ・新井重三「展示の形態と分類」(『展示と展示法』(博物館学講座 第7巻), 雄山閣出版, 1981.5)
- ・西源二郎「企画検討事項」(加藤有次ほか編『生涯学習と博物館』(新版・博物館学講座 第10巻), 雄山閣出版, 1999.12)
- ・松下眞也「展覧会の企画と運営」(『早稲田大学図書館紀要』50, 2003.3)
- ・米澤誠「広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法」(『情報の科学と技術』55(7), 2005.7)

(きどうら・とよかず)

平成17年度参考図書購入報告

参考図書費により平成17年度に購入し、本館レファレンス・コーナーに配置した参考図書のうち主な資料を下記のとおりお知らせします。

(情報管理課)

◆ 主な継続受入資料 ◆

Book page 本の年鑑 2005 1-2
イミダス 2006
会社四季報：2005年 3, 4 集
会社四季報：2006年 1, 2 集
会社職員録 全上場会社版 2006 上, 下巻
会社職員録 非上場会社版 2005 上, 下巻
会社年鑑 全国上場会社版 2006 上, 下巻
官報総索引 2004/05
現代用語の基礎知識 2006
国語年鑑 2005年版
国会便覧 2006 116-118
雑誌新聞総かたろぐ 2005年版
宗教年鑑 平成16年版/文化庁編
人物文献目録 外国人編 (2002-2004)
人物文献目録 日本人編 (2002-2004)
世界国勢図会 2005/06/財団法人矢野恒太記念会編
世界年鑑 2005
世界文学あらすじ大事典 1-2
全国試験研究機関名鑑 2006/07 1-3
全国学校総覧 2006
全国短大・高専職員録 2005
全国大学職員録 平成17年版 国公立大学編
全国大学職員録 平成17年版 私立大学編
台湾総督府文書目録 第18-19巻
知恵蔵-朝日現代用語-2006
中国書籍総目録 112-122
中国年鑑 2005
図書館年鑑 2005
日本経済新聞 CD-ROM 版 2004年版
日本国勢図会 第63版 2005/06
日本の図書館-統計と名簿-2005
「日本研究」図書目録 1985-2004
美術年鑑 平成18年版
ブリタニカ国際年鑑 2005年版
読売年鑑2006
読売年鑑 2006 別冊 分野別人名録
理科年表 第79冊 (2006)
六法全書 平成17年版 1, 2

Althochdeutsche Wörterbuch BD.5
American reference books annual 36 (2005)

Bibliografia Nazionale Italiana:tesi di dottorato 1987-1993
 Britannica book of the year 2005
 Enciclopedia Universal Ilustrada Europeo Americana
 Suplemento 2003-04
 The europa World Year Book 2005 vol.1-2
 The Europa world of learning 56th ed. 2006
 International Who's who 2006
 McGraw-Hill Yearbook of Science & Technology 2006
 Mittellateinisches Wörterbuch bis zum ausgehenden 13
 Neue Deutsche biographie Bd.22
 The Statesman's year-book 2006
 Wer ist wer? : Das deutsche who's who BD.44 2005/06
 Whitaker's Almanack 138th ed. 2006
 Who was who in America : with world motables 2004-2005 Vol.16
 Who's who 2006
 Who's who in America 2006. 60th ed. Vol.1-2
 Who's who in france 2005-2006
 The world almanac and book of facts 2006

◆ その他の主な受入資料 ◆

オックスフォード植物学辞典
 ビジュアル・ワイド明治時代館／江戸時代館
 ファイナンス統計学ハンドブック
 音楽年鑑 2005
 絵でよむ江戸のくらし風俗大事典
 岩波生物学辞典：CD-ROM 版 第4版
 近現代日本人物史料情報辞典 1-2
 個人文庫事典 1：北海道・東北・関東編 2：中部・西日本編
 字訓 新訂 2005
 図書館ハンドブック 第6版
 戦後史大事典 1945-2004 増補新版
 太宰治大事典
 日本の出版社：全国出版社名簿 2006
 日本近・現代文学の中国語訳総覧
 日本近世人名辞典
 日本古代史大辞典：旧石器時代～鎌倉幕府成立頃
 日本語教育事典 新版
 日本史総合年表（第二版）
 日本食文化人物事典：人物で読む日本食文化史
 日本文学地名大辞典 散文編：上・下巻
 日本文学地名大辞典 詩歌編：上・下巻
 文部科学省科学研究費補助金採択課題・公募審査要覧 平成16年度：上・下
 文部科学省科学研究費補助金採択課題・公募審査要覧 平成17年度：上・下

Oxford Dictionary of National Biography. Vol.1-60.
 Oxford Dictionary of National Biography. index of contributors
 Thesaurus linguae latinae. Vol.X,1 Fasc.XV pius-plenarius

平成17年度特別図書購入報告

特別図書購入費によって下記資料を購入し、本館に備え付けましたのでご利用ください。

(情報管理課)

番号	資 料 名	内 容	出版形態
1	Wittgenstein.	ウィトゲンシュタイン研究の最重要な二次文献のコレクション。	図 書
2	Conring, Hermann - Opera.	近世ドイツの最もすぐれた国公法論者の帝国・領邦国制論集。	図 書
3	革命期19世紀パリ市街地図集成	1791年～1868年に亘るパリ市街地図を集めたもの。	地 図
4	The Blackwell Compain to Syntax.	「ブラックウェル統語論概説」は、統語論の40年にわたる研究成果をはじめて体系化してまとめたもの。世界的に著名な言語学者80名によって書き下ろされた70のセースタディで構成され、近年の統語論研究によって得られた経験的事実や理論的洞察をすべて網羅している。	図 書
5	四庫禁毀書叢刊 史部1-30	清朝乾隆期に編纂された大型叢書である『四庫全書』が中国伝統文化の宝庫であることは言を俟たないが、政治的社会的等諸般の事情からこの叢書に収録されなかった書物も数多い。今回購入した『四庫禁毀書叢刊』は、清朝政府から禁書の指定を受けた約2,800種類の書籍のうち、現存する1,500種余の書籍を影印刊行したものである。それらの文献からは、明末清初期に発せられた反清朝の言説を読み取ることができ、この時代の政治・社会・思想・文化・文学等様々な分野の研究をすすめるうえで不可欠の史料とみなせよう。	図 書
6	資料集成 現代日本女性の主体形成	1940年代から80年代にいたる女性主体の社会運動の記録をまとめた資料集成。	図 書
7	Encyclopedia of International Sports Studies. (「国際スポーツ研究百科事典」)	スポーツの科学, 社会科学, 医学をカバーし, スポーツ研究を統括する他に類例のない学術的百科事典。	図 書
8	ボワソナード民法典資料集成 第Ⅱ期 [復刻版]	本資料集成は、現行民法典の淵源であるボワソナード民法典（旧民法中の財産編部分）の立法資料を体系的に整理し、解題を付して復刻したものである。第Ⅱ期第6回配本では、法務図書館所蔵の貴重書である仏文手稿原本の復刻に加え、それに対応する形で翻刻を試みている。	図 書
9	Encyclopedia of Forensic and Legal Medicine. (法医学百科事典)	本百科事典は、医学と法律相互の関連性に関わる問題を網羅し、最新の知見が記述されている。法医病理学、臨床的な法医学を含む科学的法医学と社会的な側面を含む広義の法医学の全貌を適切に解説している。	図 書
10	China Historical Country Population Census Data with GIS Maps (1953, 1964, 1982, 1990, 2000)	中華人民共和国における過去5回の人口センサスのデータ（人口や労働力の構成、出生、移動など）に、GISによる地理情報を付加したもの。データは県単位で公表されている。特筆すべき点は、各県について位置や境界などの地理参照がつけられているため、空間的側面を重視した統計分析に必要な不可欠なデータである。	CD-ROM
11	Marx, Karl., Das Kapital. Kritik der Politischen Oekonomie. Zweiter Band. Buch II. Der Circulationprocess des Kapitals. Zweite Auflage. 1893. (マルクス「資本論」第2巻第2版1893年)	エンゲルスが存命中に出た第2巻の最後の版本。九州大学以外、国内のどの大学にもない。本書の購入によって、東北大学はマルクス『資本論』の全ての完本のオリジナルを入手したことになる。	図 書
12	Industrial Manual 1999. (企業マニュアル 1999)	アメリカ企業についての基本的なデータベースであり、本学には第1巻から所蔵されているが、この4巻が欠号となっていたので、補充購入を行った。	図 書
13	復刻版 キリスト教百科シリーズ 全6巻	キリスト教聖書および伝道に関するレファレンス書誌。	図 書
14	American Decades Primary Sources. 10vols	アメリカ史研究の重要資料。	図 書
15	Bilingual Education and Bilingualism.	非英語ネイティブに対する英語英育基礎文献集。	図 書
16	Encyclopedia of Cognitive Science.	認知科学辞典。	図 書
17	Early English Books. STC2. Unit 128-129 (近世初期英語印刷文献集成)	清教徒革命から王政復古に至る期間の英国初期刊本を集成したもの。	マイクロフィルム
18	Parliamentary Debates (Hansard). House of Lords 5th ser., Vols. 664-676 (英国議会上院議事録) House of Commons 6th ser., Vols. 424-442 (英国議会上院議事録)	英国議会上院及び下院における会期毎の議事録及び議事全体について、議員の発言・討論を逐語的に収録したもの。	図 書

「附属図書館オープンキャンパス2006」を開催

7月27日（木）、28日（金）の両日、全学のオープンキャンパスに合わせ「附属図書館オープンキャンパス2006」を実施しました。

初日は晴天に恵まれたものの、2日目は一日中雨に降られるという、慣れないキャンパスを歩き回らねばならない高校生にとっては、あまり有難くない天候でした。来場者も少ないのでは、という心配は幸いにも杞憂に終わり、両日ともほぼ同数の入館者を得、二日間で延べ2,456名に来館いただきました。

今年のオープンキャンパスイベントとして、当館が所蔵する夏目漱石の旧蔵書等からなる「漱石文庫」をパネルで紹介する展示を実施しました。この展示は、本館のみならず各分館においても同時開催し、来館した高校生及び一般の方々に好評を得ました（詳細は別記事を参照）。

館内を職員が案内する「図書館ツアー」には、二日間で275名が参加しました。学部実施のイベントの合間にも参加できるよう、30分という短い時間のツアーを設定しましたが、限られた時間の見学の中でも「地下書庫の貴重な資料に感動した」、「すごく分かりやすかったし、環境も整っていて良いと思いました」といった貴重な感想が寄せられました。アンケートの回答から、県内はじめ東北地区からの参加だけでなく、中には大阪、東京、静岡、長野など遠方から参



加している高校生もいたことが分かりました。

また、故岡本一平が漱石を描いた「漱石先生（「漱石文庫」所収）」をモチーフとしたクリアファイルを作成し、図書館ツアー後のアンケート回答者に配布しました。これが当館所蔵資料へ関心を寄せるきっかけになれば、と思います。



担当係として正面エントランスで受付等を行いました。ちょっとした発見がありました。

「学校のツアーで半ば強制的に連れてこられた」と笑いつつ、非常に礼儀正しくこちらの説明を聞いてくれたこと、館内を案内したときに「普通の学生が勉強中なので静かにね」と言う途端にちょっと緊張した顔になったりしたことなど、「イマドキ」の高校生の意外な素直さを感じました。

ただ、二日目の大雨に降られて制服から滴が落ちるほどびしょ濡れになっているのに、焦って拭くでもなく、特段気にする様子がないのは逆に「イマドキ」を感じました。おかげで雨のせいで雰囲気が澁むこともなく、前日の晴天時と同様のテンションでオープンキャンパスは終了しました。

参加された皆さんが、その後風邪を引いたりしなかったことを信じたいと思います。

（総務課情報企画係）

オープンキャンパス2006「漱石と青春」展 開催報告

企画展WG

本館・分館では、7月20日（木）～8月31日（木）まで、オープンキャンパス2006「漱石と青春」展を開催いたしました。「漱石と青春」展は、漱石の青春時代を取り上げることによって、オープンキャンパスに訪れる高校生が、漱石に対して一層の共感と関心を持ってもらおうと企画した展示会です。

漱石の青春時代にはいくつかの重要な転機があり、それらの事件や人との巡り合いは、その後の漱石の生き方や考え方に大きな影響を与えました。展示では、10代前半から30代前半頃までを漱石の青春時代とし、「大学入学を決意」、「落第から首席へ」、「進路の選択」、「正岡子規との友情」、「大学卒業とイギリス留学」というテーマで紹介しました。また20代後半から漱石は、英語教師として多くの若い人々と接しています。若者との交流は漱石の気分や考え、また小説の題材にも少なからず影響を与えました。「教師としての漱石」では漱石と教え子たちとの交流を取り上げ、「漱石から若い人々へ」では書簡や小説などを通じて漱石が若い人々へ贈った言葉を紹介し、現代の高校生へのメッセージとしました。

「漱石と青春」展 展示構成

1. 学生時代の漱石
 - (1) 大学入学を決意
 - (2) 落第から首席へ
 - (3) 進路の選択
 - (4) 正岡子規との友情
2. 教師としての漱石
 - (1) 大学卒業とイギリス留学
 - (2) 教師としての漱石－松山中学校
 - (3) 教師としての漱石－第五高等学校
 - (4) 教師としての漱石－東京帝国大学
3. 漱石から若い人々へ

また、漱石文庫所蔵資料のパネル展示や、小説作品の初版復刻版の展示、『坊っちゃん』『それから』『こころ』『道草』など、自筆原稿の複製版も展示しました。

以下、見学者の方々から寄せられた感想を紹介いたします。

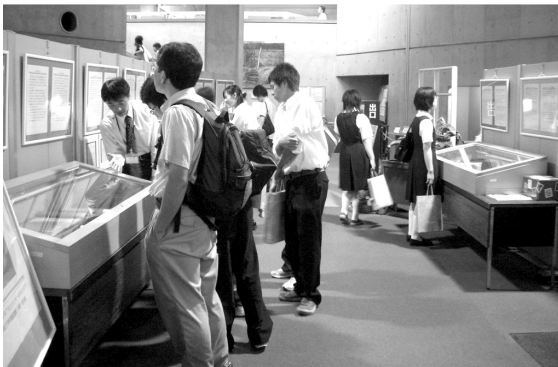
●本館来館のアンケートから

- ・複製版が読んでいて面白かった。若い人々への手紙も良かった。(高校生)
- ・原稿を見られたのが貴重な体験でした。まだ漱石の作品を読んでないので、読みたいになりました。(高校生)
- ・実際の日記や答案、記録そして原稿用紙を見学することができて良かったです。これからもっと漱石の作品を読みたいと思いました。(高校生)
- ・漱石がどのような性格・人柄で、どのような生涯を送っていたのかがよく分かり、とてもよい体験となりました。(高校生)
- ・漱石も若い時は将来何をすべきか迷ったり、失敗したりしたことがわかって、今将来に迷う自分に元気をくれた気がする。(東北大生)
- ・非常に興味深かったです。また漱石に関する展示をやって下さい。(東北大生)
- ・青春時代の漱石のエピソードは全然知らなかったので大変興味深かったです。ぜひまたこのような企画をやっていただきたいです。(東北大生)
- ・漱石の為人がよくわかる展示でした。書簡からの抜粋も印象的です。(一般)
- ・高校時代によく精読した積りでも現在からみればいい加減な読書だったと恥ずかしくなり

ます。老人になった今でも又読みたい作家であり、まだまだ（もっと）読まなければとも思います。（一般）

- ・「漱石と青春」展を再度読ませていただきました。今迄知らなかった事を改めて知り得たり、又気付いて嬉しさ倍増で、部外者にも喜びを与えていただいた事、深く感謝しております。有難うございました。（一般）
- ・時間を経ても今なお通じるものがあることが共感を呼ぶのではないかと考える。（一般）

本館での展示の様子



●医学分館来館のアンケートから

- ・漱石が東京大学予備門を落第したということを初めて知ったけれど、その落第があったからこそ努力し、偉大な文学を残した今の漱石の姿があるのだと思った。私も失敗を機に学ぶべきものをしっかりと学びたい。次ページまでの間隔がもう少し長ければ、焦らずゆっくりと読むことができますと思います。（高校生）
- ・漱石が本当に書いたノートを実際に見て、スゴイと思った。あんなに細かく正確にスケッチをしていて、小説だけじゃなくいろんなことに才能がある人なんだなと思った。それから教科書で見たことがある「解体新書」も見ることができて感動した。（高校生）
- ・漱石が若者に残した言葉をこういった場で拝見できて、貴重な体験ができました。他の偉人のも見てみたいと思いました。（高校生）
- ・手紙の内容の言葉が心に残りました。（高校

生）

- ・漱石も成績が悪い時期があったと聞いて自分も勇気づけられた。（高校生）
- ・当時の学生がとった講義のノートや解体新書は簡単に見られるものではないのですごく貴重な体験になった。夏目漱石についてはあまり知らなかったの、詳しいことを知ることができた。（高校生）
- ・漱石はきびしい人だと聞いていたが、やっぱりきびしくないこんな本は書けないと思う……本物だ!!（高校生）
- ・漱石に更に興味をもつようになった。漱石の作品はどれも面白いのでこれからも読んでいきたい。（高校生）
- ・漱石は以前建築に興味を持っていたことに驚き、その後友人のすすめで文学に転向し、勉学に励んだ努力がすごいと思った。（高校生）
- ・漱石の作品が好きで、若い人々へのメッセージには「坊っちゃん」にみられるような情熱を感じましたが、もう少し展示物が多いと楽しめたかなと思います。（一般）
- ・とてもすばらしい企画だと思います。人々の「生きざま」を通していろいろなことを学ぶことができると思うので、このような企画を多くしてほしいと願います。（一般）

●北青葉山分館来館のアンケートから

- ・夏目漱石といえば、いくつもの作品を書いた優秀な人物だと思っていましたが、「漱石と青春」展を見て、それだけではないことを知り、漱石の人間像が少しだけ見えてきたように思います。これを機会に漱石の作品をもっと読みたいと思いました。（高校生）
- ・貴重な作品にふれ、当時の漱石とその仲間の交流の深さも知り、勉強になった。（一般）

●工学分館来館のアンケートから

- ・何気なく足をとめて展を見させていただきました。若者への言葉には、とても勇気づけられ、背中をポンと押される思いがしました。

とても良い時間を過ごせたことに感謝します。
(東北大生)

- ・物理学や数学関連の漱石のプロフィールを知ることができて良かったです。(一般)
- ・思いがけず展示を知り出かけてきました。中々そろって要を得ているので感心しました。小宮豊隆先生と旧知(若いころ)でしたので、遥かの人々と日々を懐かしく思い出しました。(一般)
- ・子供と受験の下見に来たのですが、このような時にこういった展示を見る事が出来て、喜んでいます。(一般)

●農学分館来館のアンケートから

- ・漱石は初めから勉強ができたわけではなく、落第して勉強するようになったことが分かった。少し親近感を持てそうだったと思った。でも、小さいころから文学に興味がないとあのようになれなないだろうと思った。(高校生)
- ・夏目漱石にも、不真面目で、遊んでばかりだったころがあったんだなあと思った。苦手なことにも真剣になってやれば、何でもできるということを教えてもらった。(高校生)
- ・落第したり改心したり友人をなくしたり、様々な経験をしてきていて、参考になりました。また友人宛の手紙を読むと、何かに焦っていた自分を落ち着かせてくれました。(高校生)
- ・青春時代の漱石の様子、学業に関わる事、現代の私たちへのメッセージ等が良い。(高校生)
- ・今に伝わるいいことを言っていると思います。極めると決めたらとことん頑張るのがすごいです。勉強をとてする人だったのでとても見習いたいです。(高校生)
- ・漱石は身にしみることを言ってますね。本人も苦勞しながら人生を歩んだと思いました。もう少し写真やイラストや本を並べてみたりすると、より楽しいと思います。(高校生)
- ・「漱石から若い人々へ」のコーナーがとてよかった。今、勉強の面でとてもつらいけれど、頑張ろうという気持ちになった。(高校生)
- ・……僕たちに必要なものは、漱石のような根気強さだと思います。このことを、展示作品を見て学びました。大学に向けてあと3年間“根気強さ”を持ち、勉学に励んでいきたいと思っています。(高校生)
- ・漱石とはどういう人物なのか？ というところを私は全然知らなかったの、知識が増えてとてもうれしいです。また、漱石がいろいろなことをしていたのが驚きでした。(高校生)
- ・夏目漱石が使った英語の文法書を見て、私も自分の文法書があの様になるまで勉強しなければならぬと思いました。牛のように図々しく進む、死ぬまで押すという言葉が印象に残りました。(高校生)
- ・夏目漱石という名前は知っていても、漱石の青春時代についてくわしく知っている人は少ないと思うので、このような企画はいいと思う。(高校生)
- ・漱石はまじめな人だと思っていましたが、英語が嫌いだったというエピソードから、自分との親近感を覚えました。(高校生)
- ・漱石はずっと成績が良いのかと思っていましたが、落第したことがあると知って驚きました。でもそこから首席で卒業するのはすごく努力をしたのだらうなと思います。(高校生)
- ・漱石の言葉は現在になっても、心に響く。とても大事なことを言っているのだと思った。(高校生)

この「漱石と青春」展を通じて、漱石の言葉や、生き方、考え方が、高校生のみなさんに伝わり、進路を選択するうえで、また近い将来に大学生活を送るうえで、何らかのヒントとなり得ましたら幸いです。

連載「江戸の食文化」を巡る話題から(4)：仙台藩の食と名産品

情報サービス課参考調査係 渡 邊 愛 子

はじめに

平成17年度企画展「江戸の食文化」の第4部は「仙台藩の食と名産品」と題して、江戸時代の宮城県をとりまく食文化を伊達家の食事、庶民の食事、名産品にわけて展示しました。以下にその内容をご紹介します。

伊達家の食事

伊達家の食事の一例を正月料理から見ていこうと思います。伊達家の正月料理は何度か再現が試みられていますが、その復元の一つの根拠となっているのが『木村宇右衛門覚書』です。政宗の小姓だったらしい木村宇右衛門による本書は伊達政宗言行録というべき性格のものです。その中から、正月料理の項目を抜き出してみます。

まず奥田餅という大きな菱餅二種が饗され、つづいて先祖のための精進膳、組付、雑煮、さらに三の膳までである本膳、七種の肴、餡餅等の御茶請、果物類の御菓子、最後に薄茶で構成されます。文字で並べただけでも、本当にこれを全部食べていたのかと思うほどの大変な量です。個々のメニューを見てみても、海鼠、白鳥の珍味の他、海鞘、鮭子籠、布海苔等の郷土の名産品が並ぶ豪華なものだったことがわかりま

す。仙台の雑煮と言えば干ハゼの出汁が有名ですが、政宗の雑煮の材料は串鮑、串海鼠などを使った贅沢なものでした。

正月三日に野初^{のぞめ}という行事がありました。これは軍事訓練で青葉神社にはその模様を描いた絵馬が奉納されています。その野初の際、立ち寄っていたのが案内名物湯豆腐菅野でした。案内は現在の宮城野区東仙台の旧地名で、湯豆腐菅野は元禄から宝永・正徳の頃の創業ではないかと言われ、明治二十年代まで同所で営業していました。7代藩主重村から名物の看板を与えられました。湯豆腐といえば、四角く切った豆腐を想像しますが、菅野さんによれば、「なるべく細く千切にした豆腐をお椀に入れ熱湯を注いで、上等のお醤油、鰹節、柚（自家製）をかけたもの」だったそうです。

庶民の食事

江戸時代、仙台藩で庶民といえば、その大部分は農民でした。豪華な伊達家の食事に比べて農民の食事はどんなものだったのでしょうか。藩政時代、仙台藩は米作りに力を入れ、一七世紀に大規模な新田開発を行った結果、米の生産高は約一〇〇万石にのぼっていました。藩は、経済政策の一つとして「買米制」^{かいまいせい}を布いて、農

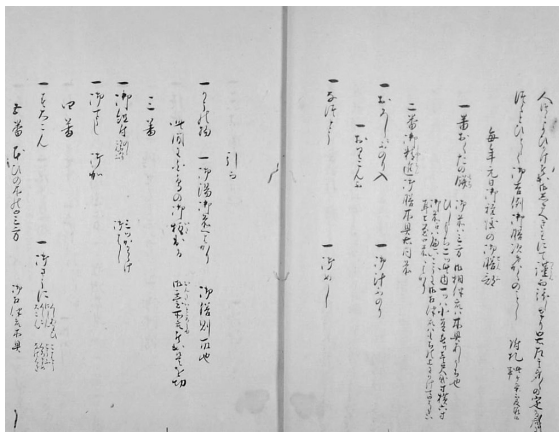


図1 木村宇右衛門覚書 木村宇右衛門 入江樸庵 写 文政11年(1828)

◆ 老番	◆ 膳部三汁十六菜	◆ 七歳七種(御運・閑候)
一 大豆粉<だいずこ>	一 本膳	一 うるか(よりかつう)
一 奥田餅<おくだのもち>(赤白)	一 煮置<くししょう>	一 数の子
◆ 二膳御膳	一 御膳<おんなます>	一 御吹物(ふりこ(餅子)・ゆ)
一 御本	一 海鼠<このわた>	一 鮭煮
一 御膳<おんなます>	一 和物<あえもの>	一 鮎はまぐり
一 (大こん・あのみ)	一 納豆	一 からすみ・九年母
一 御汁(ふのり)	一 御汁(白鳥・山芋・五分な)	
一 折こん<風布>	一 (御醬汁 鮭・山芋・五分な)	
一 納豆	一 御飯	
一 御飯	一 御引膳(肴の物(瓜・茄子))	一 御膳
一 御香/物	一 二の膳	一 御茶請
◆ 三番	一 鮭煮湯<さけのつけびたし>	一 あんころもち
一 餅大根	一 伊達雑煮	一 いろつけしいも<色付 芋>
一 御雑煮	一 御汁(肴・種)	一 御菓子
一 (餅・串子<くしこ(干海鼠)>・串貝<くしかい(干鰯)>・にしん(鰯)・とみふ(豆腐)・大こん・牛蒡・黒まめ・こんあ・根菜)	一 煎羽せんば	一 枝かま<枝>・やうかん<羊羹>・大豆あめ<あせんべい>
	一 (ふさな・かめ・種)	一 タツかん<蜜柑>
	一 御引膳(鮭のすし)	一 御薄茶
	一 三の膳	
	一 鮭子籠<さけごもり>	
	一 指肴	
◆ 四番	一 (わさび、餅子付、いり酒)	
一 御組付	一 御汁(かけな)	
一 のし<煎汁籠>・こんあ・	一 水和<みずあえ>	
一 かちくり<鰻菜>	一 (するめ、くり、生薬、大根おろし)	
一 御土器	一 御向(餅煮こごり)	
	一 御向(石焼料理)	
	一 御引膳(大根湯)	

図2 伊達家の正月料理(『木村宇右衛門覚書』より作成)

民が年貢を納めたあとの余剰米を全て買い上げました。一方、寛文8年（1668）、藩は「百姓条目」で農民が米を食べるのを禁じました。農民も米のほかに換金作物があまりなかったもので、年貢以外の貢租を納めるため米を換金せざるをえなかったのです。このような訳で、村には食料にするための米がわずかしかなかった残りました。

藩によって買い上げられた米は、江戸へ運ばれた後、転売され藩財政の大きな支えとなりました。江戸ではこの米を「本石米」と呼び、江戸の米相場の基準となりました。

江戸の庶民が普段仙台米を食べているときに、仙台藩の農民の主食は、麦・粟・稗・大根・大根の葉などをいれた「カテ飯」でした。白米だけのご飯は「いっそ飯」または「えっそ飯」と呼ばれ、正月などめでたいときに食べるごちそうでした。おかずは漬物と梅干、それにみそ汁が基本であり、みそ汁には具の野菜をたくさん入れておかずにしました。これらの野菜や梅干、みそはすべて自家製で、このほか醤油や油、納豆や豆腐までも自分の家で作りました。油は菜種を栽培して、自宅にある油締め機で絞って使ったのです。醤油を作るのは労力と時間のかかる仕事で、作り始めてから使えるまで、1年を要しました。調味料として普段使うのはみそと塩で、醤油は正月や来客があったときに、うどんなどを食べるときだけに使う貴重品でした。

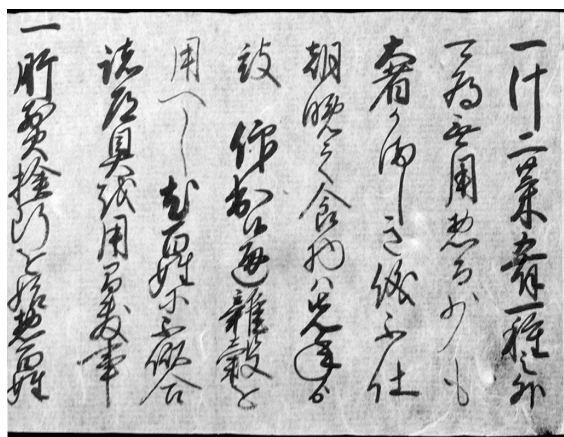


図3 百姓条目 享保4年（1719）（仙台市博物館所蔵）

仙台藩の名産品

江戸時代の仙台藩の名産品のうち、仙台味噌、白石^{うーめん}温麺、鮭製品の3つをご紹介します。

・仙台味噌

仙台味噌の歴史は、伊達政宗が城内に設けた大規模な味噌工場「御塩噌蔵」に始まります。この御塩噌蔵の御用味噌屋であった真壁屋市兵衛が、寛永3年（1626）に初めて「仙台味噌」の看板を掲げ味噌の販売を始めたと伝えられています。

江戸大井の仙台下屋敷は「味噌屋敷」とも呼ばれていました。これは江戸に常駐する三千人を超える仙台藩士のために、御塩噌蔵と同じ方法で味噌の醸造が行われていたためです。やがて余剰生産分を江戸の味噌問屋が買い請け、「仙台味噌」として販売するようになりました。赤褐色辛口の「仙台味噌」は、「江戸甘味噌」と並んで、江戸っ子の人気を二分し、仙台米とともに江戸の食文化に大きな影響を及ぼしました。

・白石^{うーめん}温麺

政宗の重臣片倉小十郎景綱の城下町白石の名産で、寒葛、和紙とともに「白石の三白」として名を馳せたのが「温麺」です。佐久間洞巖が仙台藩の地誌について著した『奥羽観蹟聞老志』では、「雲麵」の名で「千絲白髪」のような麺と紹介されています。伝承によると元禄2年（1689）、白石の酒造家大畑屋鈴木家の浅右衛

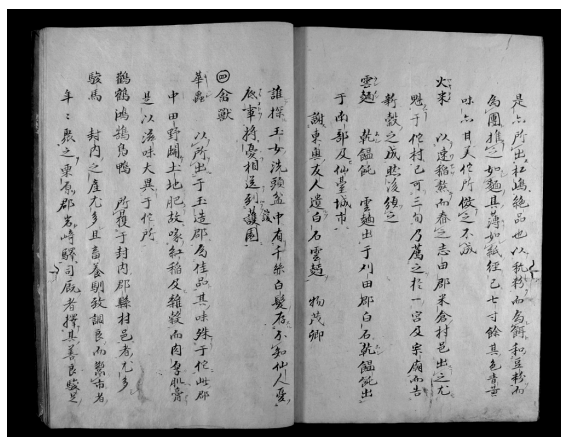


図4 奥羽観蹟聞老志 佐久間洞巖撰 享保4年（1719）

門が、病気の父親のために油を使わないそうめんを作ったのが始まりとされています。やがてこの麺は評判となり、片倉家から伊達家へ献上品として用いられました。

・鮭製品

東北地方は古来より鮭の良質な漁場でした。江戸時代の仙台藩では大量の鮭の加工品が藩に納められています。鮭製品の中でも特徴的なのが、塩鮭の腹に塩蔵の筋子を納めた「子籠鮭」^{こもりざけ}です。江戸時代の諸大名に関するあらゆるデータを網羅した『大成武鑑』では、伊達家から將軍家への贈答品リストの中に、この子籠鮭が挙げられています。また、仙台城二の丸跡（現在の東北大学川内南キャンパス）から「御子籠」と書かれた木簡が出土していて、藩の統制のもと鮭製品の生産がなされていた様子が窺えます。

参考文献

- ・小野やす「藩政時代の食習」『宮城県史』19宮城県史刊行会 1956
- ・河北新報社宮城県百科事典編集本部『宮城県百科事典』河北新報社 1982
- ・仙台市史編纂委員会『仙台市史』通史編3-5（2001-2004）、特別編6（1998）
- ・小井川百合子「もう一つの伊達政宗言行録—木村宇右衛門覚書（6）」『仙台市博物館調査研究報告』12 1992
- ・三原良吉「案内名物湯豆腐書留帳について」『一森山叢書』（第二編）塩釜神社 1975
- ・阿刀田令造『郷土の飢饉もの』仙台郷土研究会 1943
- ・森幸一「仙台味噌の歴史」『味噌沿革史』全国味噌工業組合 1958
- ・関谷宗一「奥州白石温麺史」『白石市史』2 特別編（上）白石市 1972
- ・関根達人「塩引・御子籠考—仙台城二の丸出土木簡の検討—」『東北大学埋蔵文化財調査年報』7 1994

（わたなべ・あいこ）



平成18年度東北大学附属図書館企画展

「江戸の遊びーけっこう楽しいエコレジャー」

平成18年度の企画展は、「江戸の遊び」をテーマとして開催します。

自然保護や環境保護への関心が高まりつつある現在ですが、江戸時代は環境共生社会・資源循環型社会とも言われています。

今回の企画展では、江戸時代の娯楽文化に関する資料を、エコ（環境）をテーマに構成し、さらに“遊び”という親しみ易い切り口から楽しく・分かり易く展示します。

東北大学附属図書館が所蔵する江戸学の宝庫「狩野文庫」と、宮城県図書館が所蔵する貴重資料をとおして、現代の生活・暮らしと環境との関わりに思いを巡らせていただければと思います。



■企画展（入場無料）

会場：せんだいメディアテーク
5 F ギャラリー a

期間：平成18年11月3日（金）～
平成18年11月14日（火）
10：00～19：00

□展示概要：

「第1部 季節の楽しみ」

歳時記、暦、ペット、ガーデニングの他、宮城県の行楽関係の絵巻物も展示します。谷文晁の自筆写生も。



「第2部 よむ楽しみ」

貸本、出版や、川柳、狂歌、俳句、俳諧の他、宮城にゆかりのある「回文」関係史料も展示します。



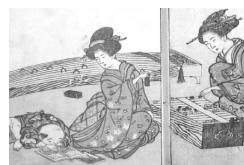
「第3部 みるきく楽しみ」

芝居、歌舞伎、相撲、寄席、見世物、怪談、妖怪と、彩り豊かな庶民文化に加え、おもちゃ絵等も展示します。



「第4部 あそぶ楽しみ」

囲碁、将棋、双六、等の他にレジャーとしての“お参り”関連資料も展示します。粋で通な楽しみ方を紹介。



■記念講演会：エコレジャーレクチャー
(入場無料)

会場：せんだいメディアテーク

1 F オープンスクエア

日時：平成18年11月12日(日)

13:00~15:30

□エコレク・グローバル

演題：「江戸の遊び」

講師：小澤 弘 氏

プロフィール：東京都江戸東京博物館・都市歴史研究室長・教授。著作は『「熙代勝覧」の日本橋―活気にあふれた江戸の町』、『都市図の系譜と江戸』など多数。



□エコレク・クローズアップ

演題：「江戸のガーデニング」

講師：青木宏一郎 氏

プロフィール：ランドスケープ・ガーディナー。(株)アイ・エヌ・エー顧問。東京大、三重大、千葉大の講師を歴任。著作は『江戸の園芸』『江戸庶民のたのしみ』など多数。



□講演会概要：

江戸時代は諸国の人・モノ・情報がクロスオーバーし、身分制社会から解き放たれた「遊び」がいくつも創案されました。江戸歌舞伎、評判美人や名所・流行を広めた浮世絵版画と絵本、誰でも投句できた川柳や狂歌、勧進相撲に大名の作庭や変化朝顔の園芸、花見に月見に雪見、隠居しておおいに遊ぶ武家や商人と、大江戸は豊かな生活を創出する都会暮らしの現場でした。

小澤氏からは展示にあるような江戸の娯楽一般について、多くの美しい映像を提示しつつお話をいただきます。青木氏からは、現在も長く

ブームが続いている「ガーデニング」について、実は江戸時代にも盛んだったことをテーマにお話をいただきます。

■関連企画「ギャラリートーク」

案内スタッフによる展示解説を行います。

実施日：11/3(金)、4(土)、5(日)、11(土)

開始時間：午後2時～(30~40分程度)

■関連企画「体験コーナー」

「起こし絵」をはじめとした江戸の遊びを体験できます。どうぞお気軽にお試してください。



■協賛・後援等

本企画展は、東北大学創立百周年記念事業として、また、共催機関である宮城県図書館の創立125周年記念事業として、開催されます。

次の機関より、協賛・後援をいただいております。

協賛：東北大学研究教育振興財団

後援：宮城県、宮城県教育委員会、仙台市、仙台市教育委員会、NHK 仙台放送局、TBC 東北放送、仙台放送、ミヤギテレビ、KHB 東日本放送、Date fm、ラジオ3、河北新報社、朝日新聞仙台総局、毎日新聞仙台支局、読売新聞東北総局、産経新聞東北総局、日本経済新聞社仙台支局

(企画展 WG)

平成18年度目録システム地域講習会（雑誌コース）を開催

7月19日から21日までの3日間附属図書館において、国立情報学研究所との共催による「目録システム地域講習会（雑誌コース）」が開催されました。

この講習会の目的は、目録業務担当の図書館職員が、総合目録データベースの構成、内容、データ登録（入力基準）に関する知識・技術を習得することです。

今回は、6年ぶりの開催とあって、東北地区の国・公・私立大学図書館、高等専門学校図書館及び公立図書館の他遠く北海道からの参加者もあり、定員一杯の20名の受講者がありました。

今回の講習会では、初日の「目録システム概論」、「目録情報の基準」の講義及び最終日の補講、自由演習を国立情報学研究所の職員が担当しました。その他の「目録検索」、「登録総論」

等のカリキュラムについては、国立情報学研究所データベース実務研修を終了した本学及び宮城教育大学の図書館職員が、講師及び講師補助者として講義や実習に携わりました。また6年ぶりの開催となったため、国立情報学研究所の方には開催期間中、常時待機していただき指導、助言等を賜りました。

受講者の方々は、実務経験や習熟度が様々であり、また普段使い慣れているパソコンとの機種の違いもあって、初めのうちは講義内容やパソコン操作に戸惑いも見受けられましたが、講師等の熱心な指導や適切なアドバイスによって徐々に緊張もほぐれ、最終的には十分な理解が得られたようで、修了証書の受領の際は、皆さん所期の目的を達成でき、満足感が溢れている笑顔が印象的でした。

（総務課）



ハワイ大学バゼル山本登紀子氏との「情報リテラシー教育」に関する情報交換会

平成18年8月30日（水）に、通算で二度目となる標記情報交換会を実施しました。

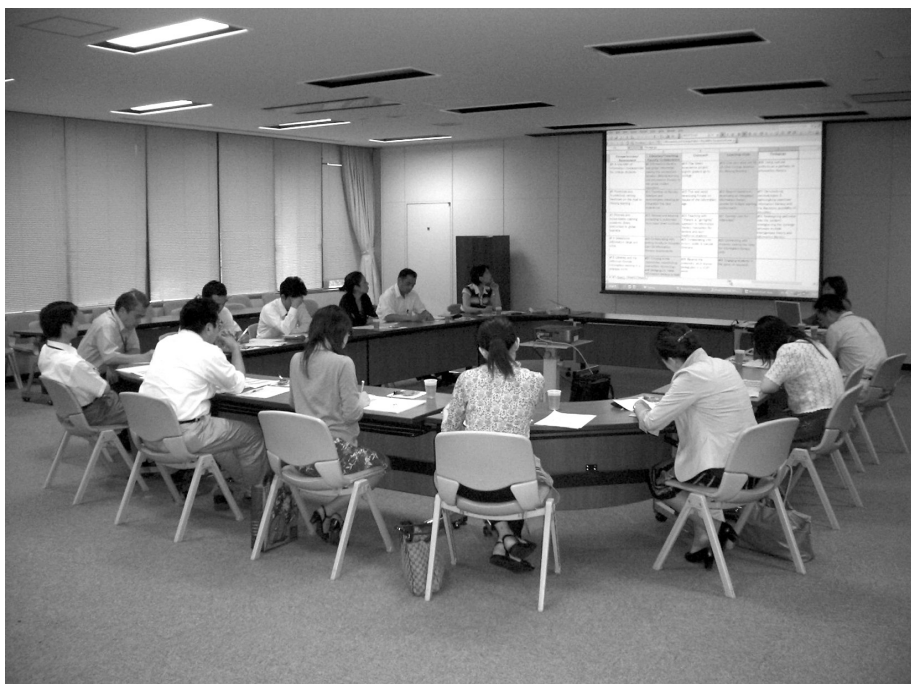
今回は、ハワイで開催されたリテラシー会議（LOEX 2006）の報告、バゼル山本氏が春学期に担当したリテラシーの授業などの報告をいただき、それに関する意見交換を行いました。会議でのホットな話題、授業での新しい試みなど、リテラシー教育の経験が蓄積しているアメリカならではの話題が続き、同じく情報リテラシーの授業を開講している本学としても、共感する点、参考になる点などが多く、意見交換が活発に行われました。

教員の身分を持つ場合が多いアメリカの大学図書館員と、事務職員としての立場を持つ日本の図書館員とでは、活動の種類も方法も異なります。もちろんこれはアメリカと日本の間だけ

の問題ではなく、各国において大学内の図書館員の立場はさまざまです。しかし、大学図書館職員として求められる業務内容は、程度の差こそありますがほぼ共通していると言っていると思います。異なる立場であっても、どのようにそれぞれが同じ目的を持つ仕事を進めているのか、お互いに参考にすべき点はどこなのか、今後の課題として何を重要視しているのかなど、情報交換で得られるものは非常に多いと感じました。

本学の情報リテラシーに関する全学授業も、今年で3年目を迎えます。学生の意見なども取り入れながら試行錯誤の状態ですすめてきましたが、今回の意見交換の結果を活かし、さらに効果的なリテラシー教育活動としていけるよう工夫していきたいと思います。

（総務課情報企画係）



青葉山新キャンパス構想連続講演会

青葉山新キャンパスに建設する新分館の基本コンセプトが7月11日の理事・副学長会議で了承された。

これに伴い、学内、学外から講師を招聘し、先進的な大学図書館の施設、機能等について講演いただくと共に質疑応答し、理解を深めることにより、青葉山新キャンパスに建設予定の新分館の構想に反映させることを目的として、下記講演会を開催しました。

- ◎ テーマ 図書館の拡張計画の事例紹介
講 師：杉山 丞（キャンパス計画室長）

日 時：7月19日（火）13：30～

場 所：附属図書館2号館4階会議室

- ◎ テーマ 新館建築と新しい学習支援
国際基督教大学15年の歩み
講 師：長野 由紀（国際基督教大学非常勤講師，元同大学図書館長）

日 時：8月23日（水）15：00～

場 所：附属図書館2号館4階会議室

- ◎ テーマ 「大学図書館とその建築」
講 師：植 松 貞 夫 氏（筑波大学附属図書館長）

日 時：9月4日（月）14：00～16：00

場 所：附属図書館2号館4階会議室

（総務課）



第61回東北地区大学図書館協議会総会

表記会議が、9月21日（木）宮城大学が当番館となり、ホテル白萩を会場として加盟39館から72名の参加を得て開催され、次の協議題について意見交換を行った。

- 1) 新規加盟館について
- 2) 第62回総会の当番地区（館）について
- 3) 平成18年度合同研修会について
- 4) 東北地区大学図書館協議会学術奨励規程の改正について

- 5) 学術奨励賞候補論文等審査取扱要項の改正について
- 6) 東北地区大学図書館協議会表彰規程について
- 7) その他
・国際シンポジウム開催への協賛について

会 議

◎学 内

18. 7.25 平成18年度第4回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 運営会議議事要録の確認方法について
- 2) 新分館の基本コンセプトについて
- 3) その他

・報告事項

- 1) 事務部門の再構築について

- 2) C S I 採択について
- 3) 自己点検評価委員会について
- 4) „北京風俗図譜”の復刻出版について
- 5) キャンパス間搬送サービスの試行状況について
- 6) 秋の企画展について
- 7) 創立百周年記念展示企画について
- 8) その他

～こらむ～ つ・ぶ・や・き (2)

片平に本館があった頃、館長がケンブリッジ大学の博士を書庫に案内されたことがあった。書庫の入り口は通路をはさんだカウンターから眺めることができた。館長が先に立たれて、洞窟のように狭く暗いその入り口を、大柄な英国紳士は足早に窮屈そうに書庫の中へと向かわれた。暫し後、カウンターに人の気配を感じ振り向くと、書庫からでられた英国紳士が腰を屈めてカウンターにいらっしゃるではないか。鍵型カウンターの角に飾った小さな盆栽を、ためつすがめつ眺めておられるのであった。

当時、カウンターには、館員の提供してくれる盆栽が邪魔にならないように置かれていたのだが、注意を向ける利用者はあまりおらず、遠路英国からいらした方の熱心な鑑賞の様子にこちらがびっくり。館長もびっくり。

分刻みであろう多忙なスケジュールのさなか、日本の美を愛でておられるそのゆったりとした風情は今でも忘れられない。その方が東洋の研究者として名高いN博士であったとは、後に知ったことである。

気配りのゆとりが少なくなり、心配の心配の種ばかり増える昨今、カウンター付近に植物がないと落ち着かなく感じるのは、こんな想い出のせいかもしれない。

（徒然子）文責：工分及川

人 事 異 動

平成18年9月30日現在

発令年月日	新 職	氏 名	旧 職	備 考
18. 8. 31	事務補佐員（宮城教育大学附属図書館・、目録情報係係）	菊 池 真 琴	事務補佐員（情報管理課・図書情報係）	辞 職
9. 12	事務補佐員（情報管理課・図書情報係）	菅 原 朋 子		採 用
9. 30		吉 原 朱 實	事務補佐員（医学分館・整理係）	辞 職

編 集 後 記

今回の木這子は、図書館員向けの開催された講習会・研修会の話題が中心となっております。図書館員が日々何を考え、何を目指して図書館業務に携わっているのかということをし少しでも知ってもらい、図書館を身近に感じてもらえればと思います。

さて、いよいよ“企画展の秋”到来です。今回の見所は宮城県図書館と共催の企画展であるということです。「江戸の遊び」をテーマ

に東北大図書館と宮城県図書館から貴重な資料が数々展示されます。また「遊び」をテーマにしていることから、ただ見るだけの展示会ではなく江戸時代の遊びを体験できるコーナーも用意し、子供から大人まで楽しめるものとなっています。会場はメディアテークです。多数のご来場、心からお待ち申し上げます。



東北大学附属図書館報「木這子」 第31巻第2号（通巻115号）発行日 平成18年9月30日

発行人 北村 明久 広報委員会委員長 菅原 英一

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022-795-5911, FAX 022-795-5909
URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>